

『サイパン・沖縄－2つの島のものがたり』

国際交流学科3年 小代ゼミナール

執筆・責任編集： 青木麻衣

執筆協力： 寶川里奈、山下昌志、嶋谷亮太、櫻井俊寿

加地弘明、伊澤麻衣、池田和陽

指導教官： 小代有希子教授

1、 はじめに

北マリアナ諸島の1つサイパンと、南西諸島に属する沖縄一何の関係もないようなこの2つの島には、太平洋戦争における「アメリカの勝利」と「日本の敗北」という、私たちが普段あまり意識しない過去が今でも深く影を落としている。第1次大戦後日本領土となったサイパンには、多くの「琉球人」が労働力として入植し、2つの島を結びつけた。太平洋戦争が始まると、この2つの島は民間人を巻き込む日米地上戦の唯一の舞台となり、米軍侵攻の前に何千人もの日本人が集団自決を遂げる。日本の敗戦後、サイパンと沖縄はどちらも米軍が占領支配し、島は「アメリカ化」した。65年経った今、サイパンはアメリカ合衆国領土の一部としては最も貧しい地域のままであり、沖縄には在日米軍専用施設の74%が集中したまま、それぞれ深刻な問題を抱えている。2つの島は、太平洋戦争における日本とアメリカの「失敗」と「責任」をどのように反映し続けているのだろうか。その事実、私たちが日本人はどう向かい合っていけばよいのだろうか。その答えを探しに、小代ゼミ生は2010年の夏、サイパンと沖縄それぞれに向かった。

2. サイパンと沖縄の地上戦

第一次世界大戦後、国際連盟の委任統治領として日本が支配を始めると、サイパンには製糖業が栄えた。気候的に似た沖縄からの移民が労働力として導入され、島の日本人口の80%を占めるようになった。本土からの移住者は、言語風習の異なる彼らを「琉球人」と差別し、自分たちを1等国民、北マリアナ諸島の原住民であるチャモロ人たちを2等国民、そして琉球人を3等国民と区別したが、サイパンには沖縄文化が豊かに根づいていった。

太平洋戦争の終盤、サイパンと沖縄は日米両軍による激しい地上戦の舞台となった。1942年のミッドウェー海戦に敗れた日本は、本土防衛のための『絶対国防圏』をサイパン島の属する南洋群島に設定しこの方面での防衛準備を進めたが、1944年6月15日、ついに米軍はサイパン島へ上陸する。島の南西部のビーチから上陸した米軍は、日本軍との激しい攻防戦を繰り広げながら北上していき、日本人、琉球人、チャモロ人、さらに朝鮮から連れてこられた労働者などの民間人が戦闘に巻き込まれた。

人々は島の北端をめざして避難したが、ジャングルで力尽きた彼らの多くは壕や洞窟で

集団自決した。人々は円陣をつくり、持っていた手榴弾を爆破させたり青酸カリを飲んだりしたという。島の最北端に行き着いて、それ以上の逃げ場を失った人々―赤ん坊を背負った母親、女子学生たち、そして親とはぐれた子供なども含めて―は、海拔 249 メートルのマッピ山の断崖絶壁から、または水面まで 90 メートルもあるマッピ岬から身を投げた。山のふもとは無数の死体で埋め尽くされ、海面は血で真っ赤に染まったという。このことから、今日マッピ山の断崖絶壁は「スーサイド・クリフ」、マッピ岬は「バンザイ・クリフ（「天皇陛下万歳」のかけ声から）」と呼ばれている。

1944 年 7 月 9 日、米軍はサイパンを制圧した。日本兵 4 万 3000 人、日本人民間人 1 万 3000 人、そして米兵 1 万 4000 人が犠牲者となった。サイパン全滅の知らせに衝撃を受けた大本営は沖縄守備軍の増強を急務としたが、1944 年 10 月、米空軍はサイパンとその隣のテニアン島を基地に、日本本土と沖縄に大規模な B-29 による空襲を開始する。そして 1945 年 3 月 26 日、米軍は沖縄の慶良間諸島に上陸した。

沖縄地上戦は、サイパン戦と同様再び民間人を巻き込み、彼らの集団自決が発生した。米軍の猛攻撃から逃れられないと覚悟を決めた人々は、手榴弾や青酸カリ、鉞や鎌などを使って自決した。慶良間諸島では、約 600 人もの民間人が集団自決をとげた。沖縄本島最南端には、喜屋武（きやん）岬という海面から約 50 メートル切り立った断崖絶壁があるが、ここでもサイパン島のバンザイ・クリフと全く同じことが起こった。（写真 1・2）

サイパン陥落後の約 1 年後の 1945 年 6 月 23 日、沖縄も米軍の手に陥落した。沖縄地上戦での全戦没者数は 20-24 万人とされ、うち日本兵と日本人民間人死者数はそれぞれ 9 万 4000 人であった。沖縄県民の 4 人に 1 人が犠牲になったという。

3. 集団自決

ゼミ生は、サイパンと沖縄の日米地上戦で起こった民間人の集団自決について考えた。

そもそも、集団自決とは、多人数での自決を意味する。満洲国でも終戦間際ソ連が進軍した際、満蒙開拓団の自決が各地で相次いだ。集団自決は日本のみの風習ではない。17-18 世紀のロシアではピョートル 1 世の弾圧に抗議して、ある宗教団体が集団自決し、19 世紀半ばにギリシャのクレタ島がオスマン・トルコ軍に制圧された際、とある修道院に逃げ込んだ婦女子 700 名も、トルコ軍に屈するより集団自決を選んだ。

しかし第二次世界大戦中、たとえばヨーロッパでは敵軍の攻勢に面して民間人が集団自決を遂げた例はない。なぜ日本人、それも非戦闘員の民間人は、米軍に投降することを拒否して死を選んだのだろうか。ゼミでは以下の 2 つの理由を検討した。

戦前の日本にはおそらく日清戦争の頃から「生きて慮囚の辱めを受けず、死して罪過の汚名を残すこと勿れ」という訓示があった。日本国民は敵の捕虜になって辱めを受けたり死後に汚名を残したりせず潔く自決するようにと教えられてきた。この教えを心から信じて、日本人としての名誉を守ろうとした人たちもいたのだろう。一方、日本軍は民間人に、

いったん米軍の捕虜になったら女はレイプされ、男は戦車に轢かれて殺される、そしてその死体はさらしものにされるなどとも宣伝し、だから敵に投降するくらいなら死を選べと教えた。実は日本軍は、敵の捕虜となった者が日本に関する情報を敵に与えることを恐れていたのだ。そのため、いったん米軍に保護され解放された日本人には「スパイ」嫌疑をかけ虐殺してしまうケースすらあった。軍民混在の戦場で、日本の民間人は米軍にも投降できず、また味方の「友軍」からもいつ刃を向けられるかわからないという状態の中にいた。そうした中で命を絶つしかない絶望したこともあったのではないかと。(写真3・4)

次にゼミが注目したのが、米軍の残虐行為というあまり知られていない側面である。太平洋戦争を戦った米軍兵士の自叙伝、回想録などによると、米兵は日本兵だけでなく一般住民に対しても残虐な行為を行ったことを認めている。そうした米兵の残虐な振る舞いが、日本人を絶望と恐怖に走らせ自決に至らしめたのではないかと。以下、アメリカ人歴史学者ジョン・W・ダワー氏の著書『容赦なき戦争』から、当時の米軍が日本軍と日本人に対して行った残虐な行為を引用して紹介する。

当時米軍海兵隊員たちは日本人を害虫に見立てて、「このシラミは南太平洋のサンゴ礁、ことにトーチカ、ヤシの林、洞穴、沼地、ジャングルに生息するので、火炎放射機や追撃砲、手榴弾、そして銃剣が効果のある駆除法である」と言い放っていた。とある米軍部隊の少将は、「捕虜はいらない」と投降したばかりの無防備の日本兵を容赦なく殺していった。サイパン戦で、米兵たちは倒した日本兵の金歯・耳・腕・または頭蓋骨などを戦利品としてアメリカに持ち帰った。サイパン島では投降を決心した民間人の男が洞窟から出てきた瞬間、その男めがけて火炎放射機を発射した。(写真5)なかなか洞窟から出てこない民間人に腹を立てて、火炎放射機の火力の熱で洞窟内の彼らを蒸し殺してしまった例もある。沖縄では、恐れおののく老女を撃ち殺し、「みじめな生活から逃れさせてやっただけだ」と気にもとめない米兵がいたことを伝える別の米兵の回想録もある。こうした米軍の残虐な行為を目の当たりにして、素直に投降する気になれただろうか。

サイパンと沖縄で起きた日本人の集団自決は、やがて皮肉にも(戦後の後付け的説明において)アメリカが広島と長崎に原爆を落とした理由の1つとされてしまう。つまり「日本人は米軍に降伏せずに集団自決するような狂乱的集団である。米軍が本土上陸した場合、サイパンと沖縄で起きた惨劇を繰り返さないように、アメリカは確実に日本を降伏させる原爆を使用した」というものだ。ここにサイパンと沖縄の悲劇が、広島―長崎の悲劇につながるのだ。実際、広島と長崎に投下した2つの原爆を搭載したB-29は、サイパンからわずか8キロしか離れていない隣の島テニアンから飛び立ったのだった。(写真6)

4. 戦後のサイパンと沖縄

太平洋戦争後、勝利国アメリカはサイパンを国連信託統治領としつつ間接的に支配下におき、また沖縄も軍占領政府の支配下においた。しかしそれが2つの島の幸福な未来を約

束したわけではない。

日本統治時代のサイパンは南洋一農業が豊かな島だった。しかし戦場となった土壌は劣化し、さらに島中に散乱した死体や戦跡を手っ取り早く隠すため米軍は「タガンタガン」というマメ科の繁殖力の強い植物の種を空中散布し、島の植物生態系を破壊してしまった。米国政府は、北マリアナ諸島の戦略的重要性には留意したが、そこに農産業を興すことは考えなかった。労働の機会を失ったチャモロ人たち島の原住民を福祉援助漬けする一方、戦後 65 年間サイパンとテニアンには米軍所有地が未開発の荒地のまま残り続けている。

沖縄も、終戦から 27 年後の本土復帰までの間、米国を唯一の施政権者とする信託統治領とされ、住民たちは占領者が大砲と軍艦で持ち込んできた文化と付き合うことになった。1952 年には「琉球政府」が作られ米国民政府が任命する行政主席が置かれたが、絶対的支配権を持って沖縄の議会が決めた法律を拒んで勝手な命令や府令を出したり、沖縄の人の土地を取り上げたり、米軍人が起こした事件に不平等な判決を下したりした。1959 年には沖縄の小学校に米軍のジェット機が墜落し、授業中の教師や生徒が死亡するという事件が起きた。1970 年には、米兵が起こした自動車事故に対する不当な事故処理に抗議するため沖縄の人々が決起したが、それに対して米軍は威嚇射撃した。1972 年、沖縄は本土復帰を果たしたが、米軍基地の存続が前提で、さらに有事の際に核武器を沖縄に持ち込む権利も米国は保有し続けることになった。本土復帰以後沖縄の経済状態は徐々に良くなったが、米軍基地による環境汚染や騒音、米兵による事件・事故などの被害は現在も続く。こうして沖縄もサイパンと同様、太平洋戦争の影に脅かされたまま未来に進んでいった。

5. 米軍基地問題

ゼミ 4 期生は 2010 年夏、沖縄における戦跡と米軍基地の現状を視察に出かけた。訪問先の 1 つである沖縄国際大学は、民家や教育施設に隣接し世界で最も危険な軍事基地とも言われる普天間基地のすぐ隣にある。2004 年訓練中の米軍ヘリが大学本館に墜落し激しく炎上する事件を体験している。死傷者はなかったが、米軍は事故処理の際に大学関係者や沖縄県警・消防団を現場に入れず、日本側に事故の原因を伝えることはなかった。今日事故現場には、崩れ落ちた本館の壁の一部と、焼け焦げた一本の木がモニュメントとして残されている。(写真 7・8)

この普天間基地移設問題が、近年脚光を浴びだしたが、その移設先候補地として前述したサイパンの隣の島、テニアン島が名乗りを上げている。ゼミ 5 期生は 2010 年 9 月のサイパン研修の際、テニアン市長ラモン・デラ・クルス氏に会って事情を聞いた。

そもそもテニアン島の 3 分の 2 は、戦後米軍所有地となったが未だ荒地のまま放置されているので、ぜひ沖縄の米軍基地を誘致して島全体のインフラ整備と島民の就労問題を解決させたいそうだ。テニアンの海は世界有数の透明度を誇るが、米軍誘致による環境汚染の心配は二の次で、基地・島民居住地区・観光地を住み分けて、沖縄のように観光と基

地が共存できる島にしたいと言う。そのため日本人観光客のテニアン誘致にも乗り気だ。

テニアン市長は親日家で、島に残る日本統治時代の遺跡は米軍基地が移転してきても大切に保存したいと語る。そして自分たちチャモロの祖先たちが生まれ育ってきた島が、広島と長崎に原爆を落とした B-29 機の発着陸基地になったことに道義的責任を感じるともいう。だから沖縄で問題になっている普天間基地をテニアンに移すことで、日本の友人を助けることにもなり、広島と長崎の罪を詫びることができるのだ、と語った。

実はテニアンやサイパン市民、とくにチャモロ人の中には、環境汚染や風俗の乱れを心配して沖縄の米軍基地招致に反対する人々も多い。日本とサイパン、テニアンの人々が一緒になってどのような知恵を出すことができるのか。ゼミ生はまだ答えが見つからない。

5. 2つの島の未来

今日サイパンと沖縄に共通する別の面とは、どちらも魅力的な熱帯性気候と美しい景観に恵まれたマリナー・リゾートであることだ。しかし同時にこの2つの島は、民間人を巻き込んだ日米地上戦の悲劇を語り継ぐことができる貴重な経験を持っている。サイパンでは島中に、日本軍の戦車や砲台、司令部壕などが手つかずのまま取り残され、スーサイド・クリフやバンザイ・クリフには多くの慰霊碑が建つ。沖縄でも、ひめゆりの塔や喜屋武岬の慰霊碑などをはじめとして、各地で戦争の悲劇を伝えるモニュメントや施設がある。違いは、沖縄の方では平和教育を観光産業に積極的に取り入れているが、2010年に米国による直接統治が本格的に始まったサイパンでは、戦争の記憶を観光産業に反映させようとする意図が全くといってよいほどないことだ。

普天間の米軍基地移転問題が、太平洋戦争における悲劇の島サイパン・テニアンと沖縄を結びつけるきっかけを再び提供した今こそ、これらの島々で起こった過去とその結果を総括的に思い出し考える良い機会である。

普天間基地をテニアン島へ移設すれば、沖縄で問題になってきたあらゆる事件や事故がそのまま持ち込まれる危険性も出てくる。沖縄の抱えてきた問題を、日本がサイパン・テニアンに丸投げしてしまうことの意味は何だろう。またサイパンに残る太平洋戦争の生々しい傷跡はこのまま放置しておいたら、やがて永久に消えてしまうだろう。しかしサイパンに日本流の平和教育の現場を築いていくにはアメリカ政府の意向を探らないとならず、それはなかなか困難らしい。実は日米両国には、太平洋戦争に関する共通理解というものがないのだ。集団自決のことも、原爆のことも、敗戦国日本に戦勝国アメリカの軍基地ができたことについても、両国はまだ語りあえない。

サイパンと沖縄—この2つの島は、太平洋戦争で民間人を含む地上戦が繰り広げられた唯一の島であり、その事実を後世に伝えていく重要な役割を担う島である。この二つの島を結び付ける縁とその役割を、私たちは考え語り続けていかなければならない。



写真 1 : サイパン バンザイ・クリフ



写真 2 : 沖縄 喜屋武岬



写真 3 : バンザイ・クリフからの投身



写真 4 : 沖縄戦での集団自決



写真 5 : 火炎放射機による焼死



写真 6 : テニアン の原爆搭載機発進記念地



写真 7 : 沖縄普天間基地



写真 8 : 沖縄国際大学米軍ヘリ墜落現場